

令和六年度特別展解説会

旭山に見るジオパーク
―旭山カンイン石と石器―

令和六年五月六日午後一時三十分～同三時 二十七名参加
 講師 和田恵治氏 北海道教育大学名誉教授 旭山ジオパーク会代表
 中谷良弘氏 旭山ジオパークの会事務局長

と語られた。
 和氏(地質学の専門家から見た)カンイン石の存在)旭山と云うと全国的に知れ渡った動物園があるが、その近辺は自然豊かな山々に囲まれている。そこで旭山はどのような成り立ちをしているのか、が私の興味を持っていく関心事である。旭山は火山で、火山と云うと大雪や十勝岳と思いが、山の形から昔は火山でそのつべりとした様子から分かる。(展示の図を指して)甘水山(三角山)これも火山であり、何時頃の事かという、カンイン石が三百二十四百万年前で、人が現れたのが二十万年前である。大雪山や十勝岳は何度も噴火を繰り返しているが、旭山は二回、カンイン石溶岩と安山岩の噴出で「単性火山」、古い時代の岩の上にカンイン石があるのだから、露出している所はまだ見つかっていない。(展示模式図によってグラフ解説)ここでカンイン石の呼び名の由来について、手作りの実物を使って音を聞かせて頂いた。会場に響く音はまさしくカンイン石であつた。その本家本元は四国の香川であり、正式名をサササイト、化学分析の結果二酸化ケイ素六十「三」六十六%という構成で、結晶が細かく黒々としていて硬い岩石である。
 さて、価値があるのかないのかであるが、動物園や三浦庭園で見つかつた様に、石器として使われているし、更には音として利用されている。(パソコンでカンイン

概要
中谷氏

○進行にあたって
 今回の特別展開催までの旭山ジオパークの会の取り組みについてその経過を中谷氏から報告を受け、その後三部に分けてそれぞれの解説者から、内容と展示物との対比をしながら具体的なお話を頂いた。
 たが、その中心の旭山には地質の上でも深い関わりがあり、大雪山、神居古潭、上川盆地の地質や地形を進めており、出来るならば教育環

境に生かしていきたいとの願いを持つている。活動としては「ジオパークフォーラム」「ジオツアー」等々活動を進めており、今回の特別展については、特に地域との関係を進めていきたい。
 自然の火山から石が生まれる。その石は溶岩から出来る。石はほろぼろになり散らばつた、その石を古代人は利用した。・と考えて人たちが、刃物に細工してナイフやヤジリに加工し上川盆地から各所に運んだ。その石器が富良野、深川、神居古潭から見つかり、和寒とか空知の方に行っている。見つかつた石「がその代表である。見つかつた石を和田教授が成分分析してみたところ、日の出遺跡の物、千代ヶ岡遺跡の物が同じパターンのものであるとの結論に達した。この事実を人を通して流通していること、証である。遺物の発掘が進んでいくと、更に新しい発見があるのではなないかと思つている。この様な考えでジオパークの会は見ている

石による演奏のメロディーが流れる。又、持参の風鈴を鳴らして、聞かせてくれた。教育大学で機械分析により黒曜石は殆どガラスからできているがサヌカイトもカンカン石も小さな結晶が密集している、目の出、千代ヶ岡、旭山の発掘物が同じもので非常に似ているとの結果であると話された。関連性を語る時、白滝の黒曜石が国宝となったその中に、旭山のカンカン石が混ざっているようだと話も聞かされて、今後に期待が持てるのではないかと話された。旭山カンカン石が、貴重な地域遺産としての価値のある石器となる事に大きな期待を持ってしていると語った。

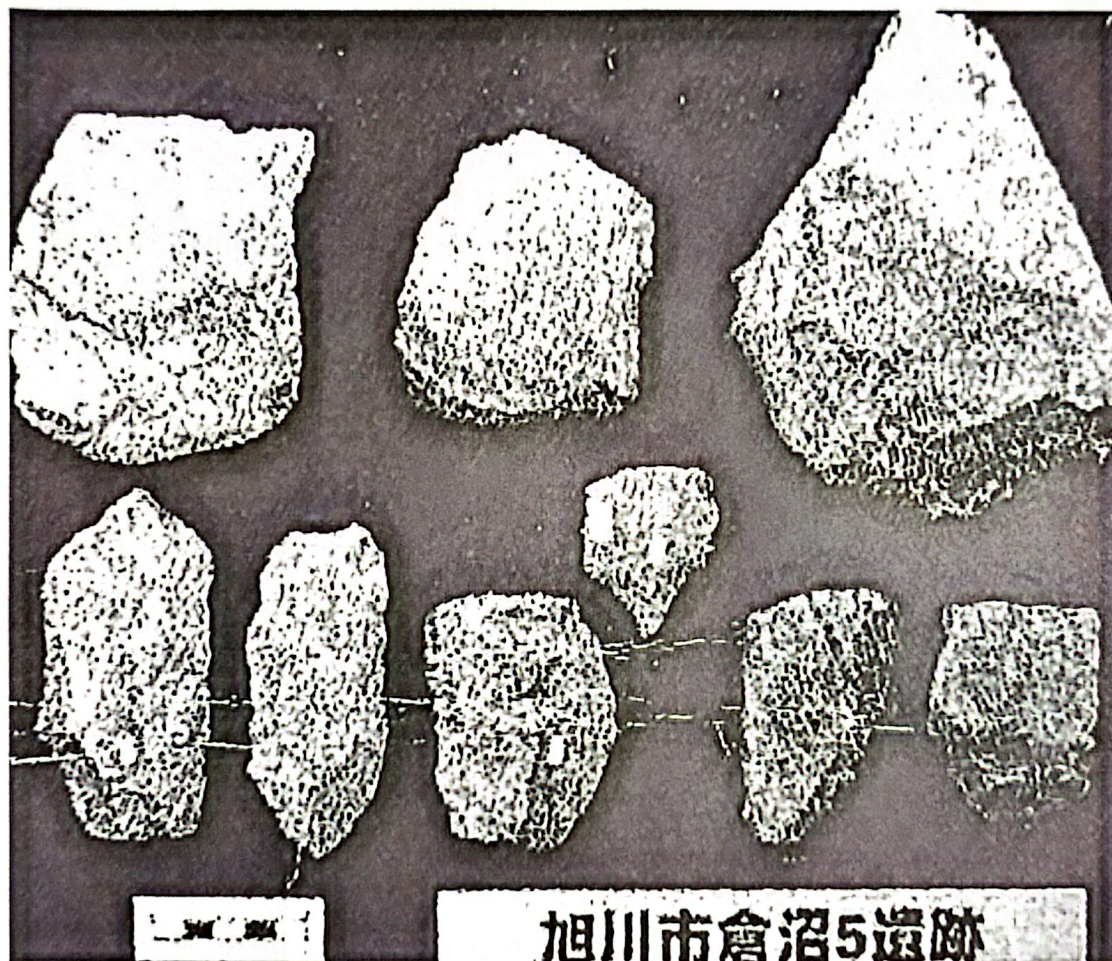
中谷氏（旭山のカンカン石と白滝の流通）

旭山のカンカン石と似たものが白滝の黒曜石（国宝）の中に見られるが、もし同じ物であれば大発見となる、との話から解説が進んだ。

これらの石は、縄文の晩期三千一千年頃と思われ、石器から予想しているが、時代についてはさうとうの幅がある。日の出遺跡についてだが、牛朱別川の段丘の上に石器が出土している。北六丁目の菅野和子さんが自宅の畑から出土した石器を集めて納屋に展示している。それをお借りして（展示室にお借りして四箱ある）ここに持ってきたのであるが、その石器を調べてみるとこの中にカンカン石があった。

雑な作りであるが、オノ、ナイフ、カンナ、ヤリ先などであり、又、土器片は縄文前期・中期（六千

七千年前）の頃の物と思われる。石器を洗ったところ、旧石器（一万五千年前）の石核（細石刃をとる為の元）があった。千代ヶ岡の遺跡からもカンカン石の石器が出てくるが、この遺跡から出土する



土器（縄文晩期三千一―二千三百年）の頃の物と思われる。白滝の旧石器の場所に行ってきた掘ってきたが、カンカン石の場合同縄文石器と旧石器がどのように違うかと言うと前者は雑な物が多い。

旭川市倉沼5遺跡

く、後者は薄っぺらで鋭利であり、風化する面白くなる。縄文時代の物は黒っぽいのにちよつと灰色に変化していく。白滝の石と同じものは北海道でも数か所、十勝地方などがあり、赤石山から掘りだされた物が、千島からカラフトにも流通しており、東北や北陸地方にも多く出土している。

三浦庭園から出土しているカンカン石が、今後の学術調査によってこれらの石器と同一の物と判断が出たときは、この地域の自慢の場所、遺跡として貴重な存在となるのではないかと話をまとめた。

石井氏（旭山の生き物たち）

ここ数年の間に見られた動植物について、展示写真をもとに説明をされた。中でも自然と人の行き来から生まれた動物のミンクやアライグマの生態に話が及んだ。特に熊については現状を報告された。植物では何といつてもラン「現在十二種」が見つかっており、貴重種として保護していかねばならないと話された。

意見交流会

参加者からカンカン石についての質問が出されたが、壮大な地球誕生の歴史に関する内容であり、専門的な分野で興味を持たれた方が多くいた。展示資料を使つての説明のほうが理解度が深まることから、閉会をした後、各参加者が講師の方々から個々に説明を受けていた。

旭山現地観察会

場所 旭山動物園三浦庭園内（旭川市移管十周年記念）

令和六年七月六日 午前十時～正午 三十名参加

講師 和田恵治氏 中谷良弘氏
石井征士氏・旭山を活かす街づくり市民の会事務局長



旭山観察会

菅原館長の挨拶の後、進行役の中谷（ジオパークの会事務局長）が進行の概要を説明、つづいて、

講師の和田恵治ジオパーク会代表から説明があつて進行していった。

地質学の見地から

まず同氏は、赤っぽい硬い石がありますけれども、これはチャートという名前の石で、白亜紀の恐竜が生きていた頃の時代の石です。

その後、丁度地球で人類が出現し始めて間もない頃、三百万年前とか四百万年前とか、その頃にこの旭山が火山の活動があり地下からマグマが上がって来て溶岩として出てきた。それが旭山のカンカン石です。その後旭山の山頂を作る又マグマの活動があつて、又山頂の溶岩を作った。その二回のマグマの活動で出来た小さな火山だったという事なんです。旭山のカンカン石といつてますが、正式名はデイサイトといつて、四国の香川県讃岐で出るサヌカイトと非常に良く似た石です。

どちらも非常に硬い石で、いい音が出る。この石が三浦庭園周辺や倉沼神社跡に出る。

そして、この硬い石が石器に使われていた。これが旭山のカンカン石の大きな特徴で、散策すると石器が顔を出していることがあります。

考古学の見地から

つづいて、中谷事務局長から、石器について、石器に使う材料として縄文時代の人がここで、これを見つけて、これは刃物に使える事を見つけて、度々取りに来たんだと思います。上川盆地の遺跡は多々あるんですけど、二百なんぼもありません。その中ではっきり分かっているもので三十ヶ所の遺跡から、この石で作った石器が出土します。それから遠くでは富良野盆地で三ヶ所位、はつきり分かっています。それから神居古潭、深川方面の遺跡からも五、六ヶ所、この石で作った石器が出て来ます。

（石のはく片を取って）このような剥片を取って細工し。ナイフや槍に加工した。白滝の黒曜石の石器も出てきますが、旭山の石で

も使える事で、時代は縄文晩期で、西神楽空港のそばの遺跡でもカンカン石剥片が大量に出ます。

最後に、昨年今頃ですけれど遠軽町白滝で旧石器の遺跡から出土した石器が国宝になったんです。国宝の中でも一番時代の古い二万年前後です。そのような古い時代のものが国宝になった。全国一古いその国宝が遠軽町にあるんです。遠軽町のこの国宝になった訳は、まず白滝で黒曜石の山があるんです。黒曜石が大量に出て来る。その黒曜石をそこで採って、その周辺で遺跡が出て来る。その遺跡から何が出て来るかっていうと、旧石器が出て来る。あそこは高速自動車道が出来て道路工事になったんです。道教委が発掘しました。その十年近く発掘した旧石器です。黒曜石の石器を採った跡が克明に出て来るんです。元の十勝石、それから剥ぎ取った剥片、そして石くずが出て来るんです。これは十勝石ですから、もうちっちゃく、ピチピチと割れるんですけど、くずが出て来て更に残りの石、残滓とさつき言いましたけど、これは石の核と書いて「せつかく」と言うんです。あちらの言葉でいうとコア（core）と言うんです。このような石も全部出て来るんです。ですから旧石器が作られた過程が全部分かるんです。それでこれが全国的に有名になって国宝です。北海道で国宝は二つですけど、その二つ目です。

関連講演会

町の宝が国の宝に

講師

瀬下直人氏

遠軽町埋蔵文化財センター学芸員

場所 旭川兵村記念館研修室 三十一名参加

令和六年十月六日午後一時三十分〜同三時



【自己紹介と論点】

一九七八年（昭和五十三年）札幌生まれで遠軽町埋蔵文化財センター学芸員の仕事をこなしているとの自己紹介から、早速スクリーンによる解説、図解によって講演が開始された。進行にあたっては前段講演、後段は石器の制作過程の実演と二段構えで行うとの説明の基で講演が開始された。なぜ白滝の遺跡が国宝となったのかを三点から説明を開始した。

- ・日本最古の国宝となったのか
- ・なぜ国宝となったのか
- ・石器はどのように作られたのか

遡ること二二〇万年前、白滝で黒曜石が誕生した。この石の特徴は、ガラス質でよく切れ、割れやすいため、加工しやすく石器として優れていたと思われる。

【映像で白滝の町と産地近辺の様子を映す】

- ・八号沢黒曜石露頭
- ・十勝石沢露頭
- ・幌加沢露頭等々の映像

三万年前頃になり北海道に人類が現れる。この頃は北上して来て

おり、その後二万五千年前は南下をしたりしながら、狩猟生活をして移動を重ねていたというのが当時の推測である。

白滝遺跡群の父「遠間栄治さん（遠軽の人）」が、石器を拾い集めていたが、石器が無いことから疑問を持ち、その頃から既に旧石器時代の事に気付いていたのである。そんな時一九四九年（昭和二十四年）に岩宿遺跡の発見が、旧石器の存在を証明した。

ここから旧石器の研究が本格的にスタートしたのである。

ではなぜ国宝になったのかという事であるが、地域が国宝にしたいと申し出たものではなく、外部から言われたのがそもそもの始まりである。白滝の石器は広範囲にあり種類の豊富さが群を抜いているため、地域では知れ渡った存在であった。





【映像による説明の概要】

・旧石器時代から新石器に時代に
移ると先端が尖ってくる（五千
年前）
・石刃技法「石刃は主に削器や彫
器の素材であり、彫器には他に
類を見ない大きさがある
斧形石器」木の伐採や土を掘る

さて、旧石器時代の人々は同じ
物を使い続けていたというのでは
ないらしく、時の流れと共に大小
や形に変化が表れている。その実
際をスクリーンと実物ではなした。

道具①図①
・搔器「太いもので皮の油を削ぎ
とる」図②
・彫器「物を彫る道具」図③
・錐形石器「穴をあける道具」図④
・尖頭器「槍先に使用の狩猟の道
具」図⑤
・削器「切ったり削ったり」の道具
図⑥
・細石刃、石を利用した槍を作っ
た（細かく切った石を槍先に利
用）
壊れたら直ぐ直すことが出来、
持ち運びもできる
※旭川当麻町射的山から出土し
たものがある
・有舌尖頭器
柄を装着する舌部を作り出した
石器で、洗練された技術が見られ
る。

【まとめ】

石器は変化し続けており、環境
の変化が大きいのではないか。特
に言われているように寒冷化から
温暖化への変化が大きく影響して
いる。又、石器の作り方も変化し
ており、それを知るために石器の
屑を集め組み立てる事を、その石
器を割っていた場所を中心にして
やっている。白滝遺跡群は旧石器
時代の「石器の場」の様な所で、
石器を求めて集まり、出来上がる
とそれを持って旅に出ると云った
感じがするのが、旧石器人達では
ないか。と話をまとめられた。

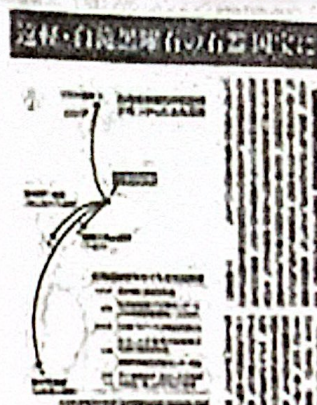
【実演】

早速実際に場所を移して実技の
実演となった。黒曜石の塊を石や
木、鹿の角等を使って碎きながら
望む形に仕上げていく作業が続い

たが、欠けた屑を見ながら必要な
核（コア）を取り出していく作業
の工程は、熟練した縄文人を思わ
せる緻密な作業であった。旭山の
カンカン石も実際に加工してもら
い、その実際を垣間見ることが出
来た。瀬下講演者の述べた言葉「必
要な石器を作るために、どれほど

の無駄な石を放り投げ出したこと
か」の一言は、石器一つを作るに
想像を絶する時間と作業が積み重
なっている事の証明でもあった。
数千年の時を過ぎた今、私達に遺
跡の重さをあらためて知らしめて
くれた様に思う。ご講演に感謝を
申し上げます。
（石井記）

旧石器時代解明へ高評価



国内最多遺地 11年かけ格上げ

加工技術、当時の住来示す



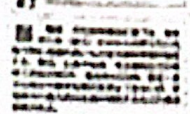
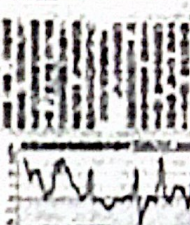
遠軽・白滝の石器類 国宝に

旧石器時代の黒曜石

国宝で最古指定へ

物価 40年ぶり36%上昇

19月20日以内%全国最高



故海軍少佐赤石久吉氏を偲ぶ

大正十五年三月二十二日殉難



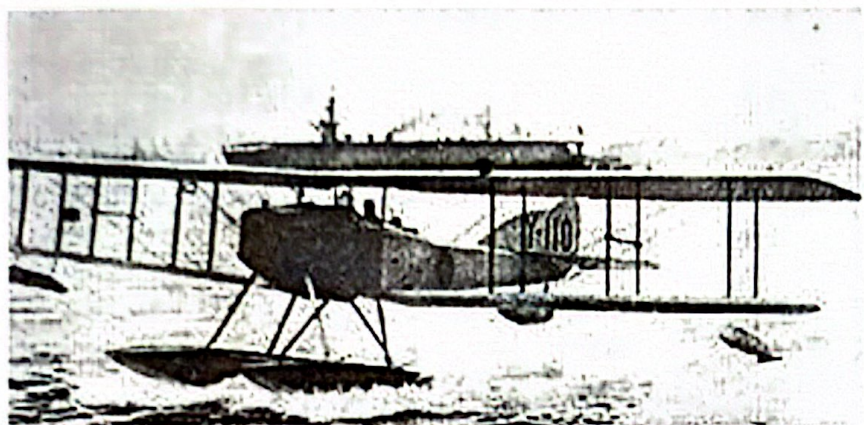
赤石少佐は屯田兵赤石元吉（青森県）の弟に生まれ、小学校から成績抜群で旧制の旭川中学校をトップの成績で卒業しました。さらに、海軍兵学校も首席で卒業し、恩賜の銀時計をもらいました。

選ばれて航空機の研究にあたり、操縦はもちろのこと、エンジンの構造までも全般にわたってマスターした、ただ一人の技術者で、海軍の至宝と言われていました。また、組張りの飛行艇で九州佐世保から横須賀の追浜まで、一、一八五キロを十一時間三十分で無着陸飛行を達成し、世間をアツと言わせた勇士です。

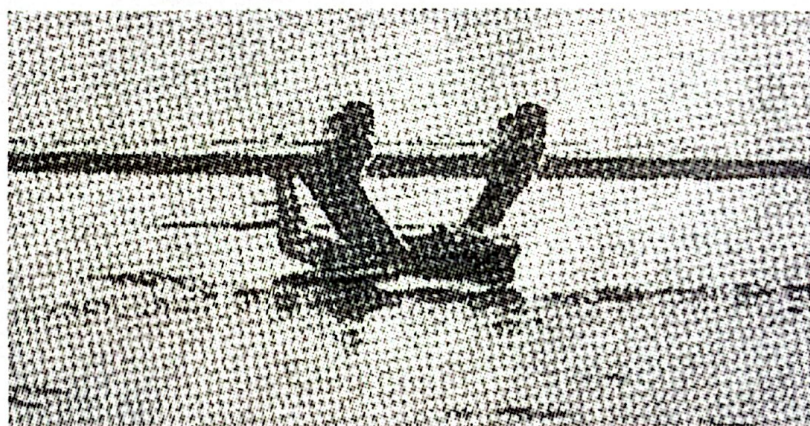
兵村記念館に展示されている原稿用紙綴に、そのときの様子を手記として残しています。「オシッコをしたら全部顔にかかった」とか、「乾パンを食べようとしたら唾がでないので飲み込めなかった」とか。「途中でエンジンから

黒煙がでたので、もう駄目かと思っていたがもとに戻っていた」など、述べております。そして無事に着水して壮挙をなしとげました。

大正十五年（一九二六年）初めて国産のジュラルミン飛行艇KB



横敵式口号甲型水上偵察機



水上滑走中の海防義会KB試作飛行艇

型機が完成し、この試験飛行を赤石さんは命ぜられました。飛行の予定日になりましたが、まだエンジンに不安がのこっていたので、赤石さんは一日延期願いを出しましたが、それも許されなくて試験飛行を試みました。心配していましたが、エンジントラブルで離れずとも状態となり墜落し水没してしまいました。ときに三月二十二日、赤石さんは三十四歳の若さで開発の尊い人柱と言うことができず。

このときの試験飛行には、隊長

と操縦士の赤石さん、機関士と通信士の四人が乗り組みました。第一日目の試験飛行はうまくいったのですが、二日目の性能試験のとき、赤石さんは「いま一つエンジンに不安があるので、もう一日待つてエンジンを調整したい」と、隊長に申し渡しましたが、隊長は「昨日は快調だったではないか、赤石心配ない乗れ乗れ」と強く促したので、ことわりきれず発進したのでした。

この殉職を聞いた、日露戦争の連合司令官で海軍の父と仰がれた東郷平八郎元帥から、遺族宛に「壮烈」の揮毫が送られてきました。また東旭川村当局も感激して、いま動物園のある旭山公園に、東郷元帥の題額の入った海軍少佐赤石久吉さんの碑を建てました。

謹告

赤石少佐百年祭を左記により斎行いたします。

記

一、日時

令和七年
五月二十七日（月）
午後三時三十分開式

一、場所

旭川市東旭川町倉沼
旭山公園記念碑前

一、天候

大雨でない限り行います。

旭川発展の礎として、電車に始まり、バス事業の展開を通じて、旭川市及び周辺地域の形成に果たした足跡を学び、これからの発展の方向性を考える一助としたい

- 展示資料案
- 電気軌道設立関係文書
 - 車両(電車・バス)に関する購入、整備に関する文書
 - 草創期の路線図
 - バス運行当時の路線図
 - 時代に応じた変遷の足跡
 - 車両の変遷
 - 地方交通としての、今後の課題

名称 旭川電気軌道百年のあゆみ
 期間 令和七年度営業期間
 令和七年四月二六日(土)
 同年十一月九日(日)
 場所 旭川兵村記念館特別展示室

令和七年度特別展 「旭川電気軌道 百年のあゆみ」



事務局

安西美智子・大阪久子
 的場恵子

委員

石場 實
 円山 宏一・笠木 薫
 武田 知憲・藤崎 百合子

副会長

石井 征士・玉井 義一
 芝山 一雄・鈴木 トミ子

旭川兵村記念館友の会運営委員

(任期、令和六年四月一日～令和八年三月三十一日)

評議員

石場 實・大谷 弘一
 石井 征士・外山 弘美
 芝山 一雄・荒川 順夫
 小西 修・鈴木 トミ子
 小檜 山隆・石川 勝
 横山 智子

理事

井田 友三・井川 龍一
 大沼 克己・米沢 匠
 佐々木 通彦・滝川 暉男

常務理事

川田 勝儀・岩崎 正則
 玉井 義一

一般財団法人

旭川兵村記念館理事

理事・評議員・運営員・事務局

去年は元館長代理を務めていた中谷旭川ジオパークの会事務局長には、特別展「旭山のカン石と石器」企画から、展示ま

も致します。背筋が寒くなる思いも致します。何か指し示してほしいわけでは

が現状であります。言われてきたが、節目に何をすべきなのかはさっぱり語られないの

当たらると、年頭より節目、節目と

今年は終戦八十年、昭和百年に

編集後記

この会の名は「働らん」と云う意味で、人間は働くばかりが能

集まっては即席で作品を発表し批評し合ったり、また興のおもむくままに天下国家を批判し談論風発

「らかん会」と云う会を作り、時々

非句等に趣味のあるものが集って

員や一般有志で書画、漢詩、和歌、

分喜代太等が中心となり、役場職

司 芦原伊佐男、旭川小学校教員國

にもなった木村百次郎、徳蔵寺初

味で知られていた広沢徳治郎をは

活気に満ちていたところ、多芸多趣

ついで日露戦争も勝利に終わ

明治三十七年屯田兵制が廃せら

ご来館をお待ちしております。

我々の生活を支える「旭川電気軌道百年のあゆみ」を展示し、地域交通の今後を学び、考える機会としたいと思っております。

紙上より御礼申し上げます。本年は地域の足として活躍し、

実施にお世話になりました。特別展の

た和田先生と共にジオパーク会員

の皆さんと共に陰に陽に特別展の

ではない、時には仕事を離れて文

芸文化を愛好することこそ生甲斐

ではないか、という主張にもとづ

いていた。

とくに広沢徳治郎は、家庭と別

居して旭山の清水谷に庵(いほり)

を建て風流三昧(さんまい)の生

活を送り、絵や彫刻に親しみ、ら

かん会の中心的存在でありその脱

俗の風格は人を驚かした。

又作品の幾つかは兵村記念館に

尚蔵されていて、晩年障子紙四巻

はとくに有名で、兵村記念館の中

核的資料として広く知られてい

る。

(平成二年二月、納連だより)

(芦原厳夫遺稿集「奔流」掲載)